

令和5年度 立正大学文学部文学科
日本語日本文学専攻コース
卒業論文発表会資料（白岩広行ゼミ）

「ハロー！プロジェクト」におけるつんくの歌詞表現の特性

会話における主語の省略について

芸予諸島における広島方言の使用状況調査と記録—上蒲刈島にて

「敬意の対象」から見る敬語

小説における補助符号の使用について

江戸期の敬語—『春色梅児誉美』を中心に—

笑いを表すネットスラングの分析

ネパール人の日本語

話し言葉に出現する縮約形について—『立正学生話資料』と日本語能力試験 N1 の聴解問題
集のスキプトの比較—

SNS での絵文字・スタンプの使用とコミュニケーションについて

青森県津軽地方方言における待遇表現—中泊町と弘前市の比較から—

キャラクターの命名傾向—特撮テレビドラマ『仮面ライダーシリーズ』を通して—

中国人学習者における「は」と「が」—日本語教育の観点から—

※ 資料の体裁について、白岩の判断で若干の変更を加えた箇所があります

「ハロー！プロジェクト」におけるつんくの歌詞表現の特性

【論文の目次】

- 1.研究テーマ
- 2.つんくについて
- 3.先行研究の整理
- 4.書籍まとめ
- 5.調査計画
- 6.対象グループについて
- 7.調査結果 (1)【恋愛】(2)【平和】(3)【その他】
- 8.まとめ
- 9.今後について
- 10.参考文献・書籍・サイト

【概要】

本論文では、複数のグループの曲を同じ人が作詞していると、同じテーマの曲でも歌詞に変化はあるのか、ハロー！プロジェクトに多くの楽曲を提供しているつんくの歌詞を比較し、調査した。

まず初めに、つんくについてやつんくの楽曲をまとめた書籍についてをまとめている。

その後は先行研究についてや、各グループと対象楽曲をまとめた。

7.の調査結果では、各グループの対象楽曲を恋愛、平和、その他で歌詞を分類し、結果を円グラフを用いて記載した。恋愛と平和という同じテーマの歌詞の比較以外にも、その他の楽曲の歌詞は、グループごとにどのような特徴があるのかをまとめた。

最後に平和に対するつんくの考えをまとめ、今回の研究で明らかにできなかったこれからの課題を記述した。

【主要参考文献】

- 萩山果歩(2021)「恋愛楽曲歌詞研究～バブル期と現在を比べて～」中央大学杉並高等学校
平原舞雪・山内博之(2022)「「AKB48」と「モーニング娘。」の歌詞の比較」『実践國文學』
実践女子大学
『ALL THE SONGS OF つんく♂』株式会社シーディージャーナル(2023)

会話における主語の省略について

【論文の目次】

第1章 はじめに

1.1 研究背景 1.2 研究目的

第2章 先行研究について

2.1 日本語における主語の省略 2.2 文章（文字言語）における主語・主題の省略

2.3 主語・主題の非省略について 2.4 会話（音声言語）における主語

2.5 会話における主語の省略 2.6 会話における反論の場面について

2.7 ポライトネスについて 2.8 先行研究のまとめおよび考察

第3章 ロールプレイ談話による調査

3.1 概要 3.2 場面設定 3.3 仮説 3.4 結果

第4章 アンケートによる調査

4.1 概要 4.2 仮説 4.3 結果 4.4 考察

第5章 まとめ

5.1 結論 5.2 今後の展望

【概要】

本論文では、会話における主語の省略について、会話している人同士の人間関係や会話の雰囲気、主語の省略にどのような影響があるのか、ロールプレイ談話およびアンケートを用いて調査を行った。

先行研究では、省略の基本的な事項として文章を分析したものを挙げた。また会話における主語および、会話自体に関連するものとしてポライトネス理論も取り上げた。

調査では簡単な議論を行う設定で、片方の意見に対して、もう一方が反論する形を取った。議題の他、初対面・友人同士や年上・同い年など関係の親密さと年齢をもとに4つの場面を設けた。ロールプレイ談話で実際の会話に近い形で調査を行い、それをもとにアンケート調査を実施した。

結果として、関係が親密になるほど主語が省略される傾向が見られ、その要因として、ポライトネス理論の考えから、親密さによって反論された際の不快感が違うことを挙げた。一方で、ポライトネス理論が主語の省略のみに影響を与えているのかを明らかにする必要がある。

【主要参考文献】

恵谷容子 (2002) 「説明文と随筆の文章における主語の省略」『早稲田大学日本語教育研究』1

早稲田大学大学院日本語教育研究科

砂川有里子 (1990) 「主題の省略と非省略」『文藝言語研究. 言語篇』18、筑波大学文藝・語学系

芸予諸島における広島方言の使用状況調査と記録
—上蒲刈島にて

【論文の目次】

- 第 1 章 はじめに
- 第 2 章 地域情報
- 第 3 章 話者情報
- 第 4 章 調査について
- 第 5 章 凡例
- 第 6 章 語彙一覧
- 第 7 章 談話資料
- 第 8 章 おわりに
- 第 9 章 謝辞

【概要】

本稿は、芸予諸島における方言使用の実態と現況の記録を目的とした現地方言話者への聞き取りの記録である。調査地域は広島県上蒲刈島で、内容は語や慣用表現の記録と談話資料からなっている。テキストの他音声データも付したことで実際のアクセントを聞いて確認することができる。

執筆に当たって 4 名の方言話者から協力をいただき、宮盛地区出身の 2 名と大浦地区在住の 3 名から得られた内容である。

記録された語や慣用表現は話者が発した音声を基本として、各種方言辞典の見出しと異なる形や記載がないものであってもそのまま見出しとして収録した。意味記述に関しても、話者の理解をそのまま記述する方針をとった。幼少期の記憶に残っている語も教えていただいたため、現在は使用されていない語や正確な意味がわからなくなってしまった語も含まれている。

また、語と慣用表現の音声データは、見出し部分が含まれた会話や用例として教えていただいた部分を選択的に公開することとした。これはイントネーションだけでなく、用例の理解に役立ててもらうことを狙ったことである。

談話資料は大浦地区在住の 3 名と質問者が集まって会話をしている場面のものである。方言話者同士の会話を聞くことができ、広島方言での実際の会話の様子を知ることができる。会話中に登場する固有名詞などの情報はテキストに付してあり、意味内容理解に支障が無いよう記述した。

【主要参考文献】

旺文社編 (2015) 『古語辞典 [第十版増補版]』 旺文社

「敬意の対象」から見る敬語

【論文の目次】

- 第1章 はじめに
- 第2章 敬語の指針
- 第3章 近年の変化
 - 3-1 古代から近現代にかけての敬語の変化
 - 3-2 敬語の習得
 - 3-3 バイト敬語
 - 3-4 タテの敬語からヨコの敬語
 - 3-5 現代の敬語の変化
- 第4章 考察
- 第5章 検討
- 第6章 総括

【概要】

第2章では文化庁が戦後間もない時期に発表した『これからの敬語』をもとに、近現代の敬語を形づくる「敬語の分類」について、現代の敬語ではどのような扱いが適切となるのか滝浦や井上、鏑水らの先行研究を踏まえて確認した。

第3章では古代から近現代に至るまでの敬語の変化を調査し、代表的な変化である「バイト敬語」や「くだけた敬語」について、それらが発生した背景には敬語自体がより多くの層に使われるようになったことで簡易化してきていること、そして現在の敬語使用者はそれらの新しい敬語について未だ違和感は多少あるものの、特に若い世代を中心に順応しつつあることが明らかになった。

第4章では第3章までに確認出来た情報を整理し、そこから得られた結果について考察するとともに疑問点を洗い出し、第5章では第4章で導き出した疑問点について、先行研究の情報と筆者の考察を交え検討する。結果として敬語の複雑化は単純化していく過程で起きていることが考察できた。

第6章にて、調査によって得られた結果をもとに考察と検討をまとめた結果、結論として敬語の形がくだけたものに変化してきていることと敬意の対象とは、

関係性はあるものの絶対的なものではなく、より広く敬語が使用されていく変化の流れで敬意の対象は古代敬語よりもヨコに広がりを見せていることが分かった。

【主要参考文献】

- 井上史雄(2017)『敬語は変わる―大規模調査からわかる百年の動き』大修館書店
- 金田一京助(1959)『日本の敬語』角川新書
- 近藤泰弘・澤田淳(2022)『敬語の文法と語用論』開拓社

小説における補助符号の使用について

【論文の目次】

- 1.はじめに
- 2.先行研究
 - 2.1 補助符号の歴史 2.2 学校教育における補助符号 2.3 補助符号の表現効果 2.4 ダッシュと三点リーダーの表現効果 2.5 本稿の目的
- 3.近代文学における補助符号
 - 3.1 調査方法 3.2 調査結果
 - 3.2.1 夏目漱石 3.2.2 森鷗外 3.2.3 芥川龍之介 3.2.4 太宰治
- 4.おわりに

【概要】

本稿では補助符号の表現特性に着目し、句読点などと比較すると使用の自由度が高い三点リーダーとダッシュについて、近代文学での用例を収集し、分析を行った。

森山(2013)は、補助符号の表現効果について、小説において補助符号がパラ言語的側面や言語化できない感情などを表していること、また補助符号は音声的実体性に一定程度関連することを述べている。三点リーダーとダッシュの使い方については、文化庁の『くぎり符号の使ひ方』などに記載されていたが、教科書に示されている内容と比較すると相違する点もあり、句読点ほどの体系づけがされていないことが分かった。

小説での補助符号の用法に関する調査は、夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介・太宰治を対象に行い、地の文・会話文・手紙文のそれぞれで用いられている数と、実際の用例を挙げての分析を行った。また、会話文については、新實(2019)が補助符号と発話の位置関係を12パターンに分類しており、その分類も用いて考察を行った。

その結果、三点リーダーは会話文で用いられることが多く、発言を途中でやめる、遮られる場合や、文末での口調の表現に使用されることが多かった。ダッシュは会話文のほか、地の文や内言でも用いられており、説明のためや地の文と会話文など異なる種類の文を繋ぐ場合、口調や感情の表現などに使用されていた。夏目漱石の地の文と発言を分ける三点リーダーの例や、芥川龍之介のダッシュで内言の末尾をぼかす表現など、作家ごとの工夫も見られた。一方で、森鷗外のようにほとんど補助符号を使用しない作家もいることが分かった。補助符号の組み合わせについては、必ずしも12パターンに分類できるわけではなく、言葉を「つなぐ」という補助符号の特性にも着目した上で分類を再考する必要があるだろう。

【主要参考文献】

- 新實葉子(2019)「日本語の小説における符号による表現に関する一考察：三点リーダ、ダッシュ、句点、読点を例に」『朝日大学留学生別科紀要』16(16)、朝日大学留学生別科
- 森山卓郎(2013)「句読点、補助符号とその表現効果(特集 ことばの名脇役たち)―(書きことば)」『日本語学』32(5)、明治書院

江戸期の敬語
—『春色梅児誉美』を中心に—

【論文の目次】

- 1 はじめに
- 2 先行研究
 - 2.1 江戸の歴史 2.2 江戸時代の諸制度 2.3 江戸語の形成
 - 2.4 敬語とは 2.5 本論文で扱う敬語について
- 3 調査内容・調査結果
 - 3.1 作品概要 3.2 あらすじ 3.3 調査内容 3.4 調査結果
- 4 まとめ
- 5 今後の展望

【概要】

なぜ敬語ができたのか気になったため、敬語とは一体どのような存在なのかを考え、敬語の発展を調査し、特に様々な背景があつて日本国内で言語が混ざり合った江戸時代の敬語について研究したいと思った。

都市になる前の江戸は寂れていたが、江戸の地が栄え、いろいろな地域から人が集まる場所となった。そのため共通の言葉が必要となり、身分制度や参勤交代など諸制度が絡みながら敬語が発展した。江戸時代の敬語を調べるにあたり重要なキーワードは江戸語であった。江戸語は関東方言と上方語、その他の地方の言葉によって構成された言葉である。敬語とは階層・職業・年齢・性別・気質・雰囲気と関係がある。今回の調査ではこれらに注目して分析した。

調査として江戸時代後期の人情本『春色梅児誉美』を資料に江戸期の敬語を調べた。尊敬語「オッシャル」「サッシャル」、丁寧語「マス」、「ゴザイマス」、「デゴザイマス」がどのくらい使われているのか、誰が使用したかを調査した。調査対象は主な登場人物、主人公の丹次郎をはじめとした米八・長・お由・この糸・藤兵衛の六人を扱った。米八～この糸が女性で主人公と藤兵衛二人が男性である。全体的にわかったことは『春色梅児誉美』を通して江戸時代では実際にどのような敬語が使われていたのかということだ。階層・職業・年齢・性別による敬語の使用の差は見えたが、気質・雰囲気から敬語を使用するかどうか今回の調査ではわからなかった。敬語とは円滑にコミュニケーションをとるための共通の言葉として存在し、江戸時代後期には現在も使用されている敬語が使われるまで発展していたことがわかった。

【主要参考文献】

- 田中章夫(2017)『東京ことば—その過去・現在・未来』武蔵野書院
土屋信一(2009)『江戸・東京語研究—共通語への道—』勉誠出版
水原明人(1994)『江戸語・東京語・標準語』講談社

笑いを表すネットスラングの分析

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究 2.1 菅原 (2016) 2.2 岩崎・前田・川島 (2017) 2.3 青柳・川合 (2019) 2.4 松村 (2021) 2.5 本研究の目的

第3章 アンケート調査 3.1 アンケート調査概要 3.2 アンケート調査結果 3.3 結果を受けての考察 3.4 調査結果のまとめ

第4章 ネットスラングの分類 4.1 調査概要 4.2 調査結果 4.3 調査結果のまとめ 4.4 調査結果を受けての考察

第5章 「ワロス」と「ワロタ」の違い 5.1 強調表現「テラ」「ギガ」「メガ」 5.2 調査結果 5.3 強調表現「クソ」 5.4 調査結果 5.5 まとめ

第6章 おわりに

【概要】

本論文では、笑いを表すネットスラングである「笑」「w」「草」「ワロス」「ワロタ」に焦点を当て、それぞれの意味・用法を明らかにすることを目的とした。調査方法は、アンケート調査と X(旧 Twitter)の検索機能を用いて用例を収集した調査である。以上の調査から、次のような結果が得られた。「笑」には文章を和らげる効果があり、「w」には、他のスラングよりも笑っている様子を強く表現し、自身が経験した予期せぬ出来事や不満を伴う内容に用いられやすい傾向がある。「草」は、一部では記号的な用いられ方をし、対面での会話でも用いられる。内容はポジティブなものからネガティブなものまで幅広く使用される。「ワロス」は、使用どころによっては相手に不信感や嫌悪感を与える場合がある。「ワロタ」は、対面での会話でも使用され、何かが過剰であることに対して、笑わざるを得ない状況で使用される傾向にあることが明らかとなった。

【主要参考文献】

岩崎真梨子・前田梨沙・川島大樹 (2017)「若者が着目するインターネット上の表現—ネットスラングと方言」『八戸工業大学紀要』36、八戸工業大学

青柳詩織・川合康央 (2019)「ニコニコ動画のコメントにおける笑いを表現するネットスラングの分析」『人工知能学会全国大会論文集』33、一般社団法人人工知能学会

松村愛美 (2021)「笑いを表すネットスラングの使われ方」『語文』2021(170)、日本大学国文学会

ネパール人の日本語

【目次】

序章 多様化が進む社会での相互理解のために

第1章 先行研究の整理

1-1 ネパール人日本語学習者の現状 1-2 近隣国であるインドでの日本語教育の現状

1-3 ネパール人日本語学習者の日本語

第2章 調査方法及び談話資料の作成について

2-1 調査の目的と意義 2-2 調査方法、談話資料作成の手順 2-3 話者情報及び居住歴

第3章 調査結果

3-1 ネパール語とは 3-2 学習状況 3-3 音声 3-4 誤用 3-5 非用

3-6 日本語との発音の類似についてのネパール母語話者の見解

3-7 日本語とネパール語の語用についての比較

第4章 考察

4-1 ネパール母語話者における課題にむけて 4-2 日本語学習者全体における課題にむけて

終章 今後の展望

【概要】

近年、インド亜大陸出身者の在留外国人が増加しているが、実際にはインド人よりネパール人の方が日本に多く滞在していることがわかっている。しかし、在留ネパール人が増加した要因は、内政の混乱による雇用の不安定化によって、日本国内に留学ビザで滞在しながらアルバイトをして金銭を得ることが目的であることが多い。ネパール人学習者には、このような背景があるため、日本語教育に関わる社会的な問題を研究したものが多く、実際に彼らが話す日本語の特徴に言及した先行研究があまり見られなかった。そこでネパール人男性一名に協力していただき、談話資料の作成を行い、学習歴、母語（ネパール語）の影響による音韻変化、誤用や非用を分析・調査することにした。

調査の結果、ネパール語の文法や音韻規則に起因することが推測される長母音の短母音化、子音の変化、動詞の活用の誤用などが認められた。また、協力者は教室学習から日本語の学習を始めたが、学習期間は十全とは言えず、結果的に自然習得に近い状態であることがわかった。

今回の調査・研究を通して、フィールドワークの経験を積むことが出来た。同時に一次資料の貴重さも実感した。また、今回は日常会話を中心とした研究であったため、次の研究では、やさしい日本語が生まれる背景となった「お役所言葉」などが、在留外国人の日本語習得や生活にどのような障害を与えているかを研究し、より充実した日本語教育とはなにか、本当の意味での共生とはなにかを模索していく。

【主要参考文献】

- 岩切朋彦 (2015) 「日本語学校におけるネパール人学生の様相とその諸問題—福岡県 A 校に通うネパール人学生へのライフストーリーインタビューから—」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』 9
- 白岩広行 (2011) 「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」『阪大社会言語学研究ノート』 9
- 引田梨菜 (2019) 「ネパール人日本語学習者に対する知覚実験—長音・促音・拗音に着目して—」『専修国文』 105

話し言葉に出現する縮約形について — 『立正学生談話資料』と日本語能力試験 N1 の聴解問題集のスキプットの比較—

【論文の目次】

1. はじめに
2. 先行研究 2.1 土岐 (1975) より 2.2 大平 (1982) より 2.3 齋藤 (1991) より
2.4 呉 (2016) より 2.5 韓 (1991) より 2.6 中島 (1993) より
2.7 丸山 (1989・90) より 2.8 先行研究をふまえた本研究の目的
3. 調査概要 3.1 調査方法 3.2 調査資料について
4. 調査結果 4.1 『立正大学学生談話資料』に現れた縮約形の使用状況
4.2 日本語能力試験 N1 の聴解問題集のスキプットに現れた縮約形の使用状況
4.3 『立正学生談話資料』と日本語能力試験 N1 の聴解問題集のスキプットに出現した縮約形の比較
4.4 先行研究と『立正学生談話資料』と日本語能力試験 N1 の聴解問題集のスキプットの縮約形の使用率の比較
5. 終わりに

【概要】

本研究では日本語母語話者の日本語と日本語学習者が学ぶ日本語での縮約形の使われ方の違いと縮約形の使用頻度を立正学生談話資料と日本語能力試験の N1 の聴解問題集を使用して調査を行った。

土岐 (1975) は、縮約形は一般的に「インフォーマルな場面に於いて、早く話すときに使われる。」というようなことが言われているということに着目し、NHK 教育テレビジョン、『教養特集・話し方半世紀』というテレビ番組を調査し、そこに出現した縮約形の種類を形別に 10 種類にまとめた。

齋藤 (1991) は、日本語関係の論文で「縮約形」を一番広い意味で捉えているのは土岐 (1975) であると、現代日本語の「縮約形」に対して、以下のような定義を提案した。

現代日本語において、同一と認められる語 (句) が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間の関係において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた方の形を「縮約形」と呼ぶ。

a. 音節数の減少 (音節の脱落・融合) b. 音数の減少 (単音の脱落) c. 音量の減少 (音の長さの短縮)

呉 (2016) は、縮約形の種類を考察し、使用頻度の高い項目は何か、ドラマのジャンルによって縮約形の使用実態に違いはあるかどうか、ドラマのシナリオと日本語能力試験の聴解問題との違いは何かなどを分析した。ドラマのシナリオと日本語能力試験の聴解問題それぞれの使用率の高かった縮約形は使用率では多少の違いが見られたが、上位 5 項目の縮約形の種類はほとんどが同じものであり、差が見られなかった。

本研究では『立正学生談話資料』と日本語能力試験 N1 の聴解問題集のスキプットを使用し、そこに現れた縮約形を集計し、縮約形の使用率の違い、使用頻度を調査・分析した。また、先行研究との比較も行った。調査結果は、談話資料と N1 聴解スキプットで異なる形で使われていた縮約形もあったが、ほとんどの縮約形で同じよう形で使用されていた。若者の友人同士の会話の『立正学生談話資料』でも、日本語学習者が受ける日本語能力試験 N1 の聴解スキプットで使用される縮約形には大きな差がないということが分かった。また、先行研究と談話資料と N1 聴解スキプットに出現した縮約形を比較して、縮約形は年代によって使用率はさほど変わらないという結果となった。

【主要参考文献】

- 呉岳樺 (2016) 「話しことばにおける縮約形に関する研究 — ドラマと日本語能力試験の考察を中心に」『日本語教育研究』62、長沼言語文化研究所
- 齋藤純男 (1991) 「現代日本語における縮約形の定義と分類」、『東北大学日本語教育研究論集』6
- 土岐哲 (1975) 「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28

【論文の目次】

第1章 先行研究の整理 1.1 LINE やスタンプの利用状況 1.2 LINE スタンプの利用動機 1.3 絵文字とスタンプの使用差 1-4 小括

第3章 スタンプの使用 3.1 LINE スタンプを利用する目的 3.2 利用するスタンプの種類 3.3 小括

第4章 スタンプの種類と使い分けについて 4.1 個人チャットとグループチャットでの違い 4.2 スタンプの使い相手と場面について 4.3 小括

【概要】

現代では、簡単にコミュニケーションをとることができるようになっている。そこで問題となるのがコミュニケーションの方法である。SNS は主に文章だけで、年齢も性別も異なる人とやり取りをするため、自分の感情を伝えることが非常に困難になるのである。

そこで自分の感情を伝えることを助ける目的として、絵文字や、スタンプというものが作られたのである。

本研究では、対象世代として、スマートフォンの使用が当たり前になっていて、様々な SNS を使いこなしている 10 代か 20 代を中心に調べることにする。調査対象とする通信機器は、スマートフォンのみとし、その中で最も若者の利用率の高い「LINE」でのスタンプ利用について調べたい。

「使いやすい・便利だから」というのが一番の大きな理由というのが分かった。

それに続いて多かったのが「返信がめんどくさい」「会話を終わらせたい」というもので、会話に対してマイナスな印象を持っているときに、手っ取り早くその場をしのげるというように使っている人も多く存在していた。他にも「文章では表現できないニュアンスを伝えたいとき」という意見も多数あり、やはり文章だけで相手とやり取りをするうえで、自分の感情や、伝えたいことが相手に誤って伝わっていないかを心配し、自分の表現の補完をする役割として使っている人も多くいるということが分かった。

趣味や楽しさの共有という目的で、スタンプを利用している人も多く、「芸人」「アイドル」「アニメ」「キャラクター」「アーティスト」など、相手との共通の話題にできるものを送ることができるという理由で、使用されていた。

本論文の目的は、LINE スタンプの利用動機や利用目的を調べて、今後のコミュニケーションや、自己表現をやりやすくするためであった。実際にスタンプの利用目的では、多くの種類があることで、従来の絵文字等では表すことのできなかつた「自己表現」ができるようになった。文字だけでやり取りを行う SNS 上では、とても簡単に自分というものを知ってもらうことができ、それに加え絵文字や、自分の文章では表現できないニュアンスや、感情を相手に伝えることができるようになった。その結果が現代の若者の多くがスタンプを購入し、利用している今の状況なのである。本論文ではスタンプを送ることをメインに取り扱ってきたので、どのようにして色々な意味で送られてくるスタンプを理解しているのかというところまでは、わからなかつた。今後は、スタンプを受け取る側の心理や、解釈の仕方もさらに調べていくことで、コミュニケーションをとる際のトラブル回避や、円滑なコミュニケーションをとる方法が見えてくるのではないかと考える。

【主要参考文献】

大家まゆみ(2022)「LINE スタンプ・顔文字・絵文字:言語を視覚化する日の モバイルコミュニケーション」『教職・学芸員課程研究』3

加藤由樹・加藤尚吾(2017)「LINE スタンプの特徴の解説と情報処理学会公式 LINE スタンプの期待」『情報処理』58

津軽地方方言における待遇表現 —中泊町と弘前市の比較から—

【論文の目次】

第1章 序論

第2章 待遇表現と文末形式

2.1 方言における待遇表現の概要 2.2 津軽地方方言における文末詞の待遇的特徴

第3章 調査

3.1 本調査の着眼点 3.2 調査 3.3 調査項目・文の整理

第4章 調査結果を踏まえた中泊町における待遇表現の特徴の分析

4.1 調査結果と分析 4.2 待遇における調査結果まとめ

第5章 弘前市における待遇表現との比較・考察

第6章 結論

【概要】

本論文では、青森県津軽地方で話されている津軽方言の待遇表現について考察する。青森県は、津軽地方と南部地方に大きく分かれており、それぞれで津軽方言、南部方言といった独自の方言が形成されている。国立国語研究所(2011)は、「弘前市のことばは、いわゆる代表的な津軽弁であり、そのうちでも旧・弘前市内はその中核をなす。青森市および津軽半島沿岸部では早い調子で乱暴な感じがあるのに対し、弘前市は一般にゆったりしたやわらかい感じである。」と記載している。これに対し筆者は、「津軽半島沿岸部」にあたる、漁村部や山村部の一角である中泊町では、「早い調子で乱暴な感じがある」とされている一方で、かつての弘前市と同じような待遇表現はみられるのか、或いは独自の待遇表現を形成しているのかといった疑問を中心に、中泊町で使用されている文末詞の待遇調査を行い、弘前市とどのような違いがあるのか比較を行う。

調査は、川瀬(2020)の行為指示表現調査「上下・親疎・ウチソト」を参考にし、具体的な場面と標準語の例文をこちらが提示して方言訳を答えてもらうといった形をとる。

調査の結果、以下のことが明らかとなった。一つは、弘前市で使用されていた丁寧な表現である「ネサ」「ネハ」等は、中泊町では用いられず、弘前市だけに使用が限定されていたということである。しかし、中泊町では、代わりに「デシ」を用いていた。この「デシ」が中泊町における上待遇なのではないか。そして、ウチには「ナ」や「ネ」を使うが、ソトには「デシ」を使うことがわかった。二つ目は、弘前市で用いられている丁寧な方言が他の市では使用されていないという先行研究がみられたが、中泊町においても、「ガ」「ベガ」「ケロ」「ジャ」を用いて、ウチとソト、親疎で待遇表現として使い分けされていることがわかった。上記の文末詞の待遇表現は、中泊町の方言でも有していたといえる。

【主要参考文献】

- 国立国語研究所(2011)『全国方言談話データベース：日本のふるさとことば集成第1巻 北海道・青森』国書刊行会
- 佐々木隆次(1988)「青森市方言文末詞の考察」此島正年博士喜寿記念論文集刊行会編『此島正年博士喜寿記念 国語語彙語法論叢』桜楓社

キャラクターの命名傾向
—特撮テレビドラマ『仮面ライダーシリーズ』を通して—

【論文の目次】

- 第1章 はじめに 1.1 概要 1.2 『仮面ライダーシリーズ』について
- 第2章 研究方法
- 第3章 先行研究のまとめ 3.1 語構成について 3.2 音象徴について 3.2.1 子音の音象徴について
3.2.2 有声阻害音の音象徴について 3.2.3 母音の音象徴について
- 第4章 仮説
- 第5章 調査について 5.1 調査の概要 5.2 「仮面ライダー図鑑」とは 5.3 調査対象
- 第6章 語構成 6.1 調査方法 6.1.1 調査内容 6.1.2 条件 6.1.3 名前要素の分類 6.2 調査結果のまとめと分析 6.3 考察
- 第7章 音象徴 7.1 調査方法 7.1.1 調査内容 7.1.2 条件 7.2 結果のまとめと分析 7.2.1 調査 a
7.2.2 調査 b 7.3 考察
- 第8章 まとめと今後の展望

【概要】

本論文は、特撮テレビドラマ『仮面ライダーシリーズ』のキャラクター名に着目し、その命名傾向を語構成と音象徴の二つの観点から調査した。語構成では変身後の仮面ライダー名を構成する名前要素を、前半の名前要素前と後半の名前要素後に分けて分類した。その結果、名前要素前では、内面的特徴を表す「内面的要素界」が、名前要素後では「名前要素なし」が最も多かった。「内面的要素界」が多いことから、仮面ライダーの外見は変身に使用する道具に付随した二次的な要素で、道具の能力の方が重要になっていると考察した。また1つの名前要素で構成されている名前が多いことは、仮面ライダー名の後にフォーム名が続くことが考慮されていると考えられる。音象徴ではキャラクター名に使用されている音の傾向を調査した。その結果1モーラ目において、男性名では阻害音が、女性名では共鳴音が、仮面ライダー名では有声阻害音が多く使用されていた。子音に関しては、阻害音が男性名で、共鳴音が女性名でそれぞれ好まれるという先行研究と同様の結果であったが、母音に男女差は見られなかった。また、変身前の人物名に比べて変身後の仮面ライダー名で有声阻害音が多いことは、仮面ライダーに有声阻害音の大きい・重い・強いというイメージを持たせるためだと考察した。今回、仮面ライダーたちのネーミングに込められた意図についてわずかながらに触れることができたように思う。

【主要参考文献】

- 川原繁人(2017) 『「あ」は「い」より大きい!?—音象徴で学ぶ音声学入門』 ひつじ書房
- 竹野成音(2021) 「『ポケットモンスターシリーズ』におけるポケモンのネーミング法 ～名称の構成要素の分類を手掛かりに～」 大阪教育大学教育学部卒業論文

日本語教育における「は」と「が」

—中国人学習者を中心に—

【論文目次】

はじめに

第一章 先行研究

1.1 「は」と「が」の使い分け 1.2 先行研究の考察

第二章 調査の準備

2.1 調査の目的 2.2 調査の準備 3.2 調査方法

第三章 調査の問題文の分析と回答傾向に関する仮設

3.1 調査原文の分析 3.2 回答傾向に関する仮設

第四章 調査結果と考察

4.1 調査結果 4.2 回答傾向と誤用原因に関して

第五章 結論と今後の課題

【概要】

「は」と「が」は、日本語の構文の最も重要な部分にかかわるものである。そのため、使い方が複雑で、それが「は」と「が」の習得が困難である原因の一つにもなっている。本稿は中国人学習者がどのように「は」と「が」を使い分けられているのか、なぜその使い方にしたのか、「は」と「が」の使い分け方に苦手と感じたところはどこかを課題にする。

本稿は日本語母語話者と中国人学習者に空所補充調査に協力してもらい、その調査結果を比較する。そして、日本人母語話者の正答率とほぼ変わらないとことが調査結果からわかる。この結果が出たことから、中国人学習者が「は」と「が」の使い分け原理について系統的に学習していれば、日本語母語話者とほぼ同じように上達することができると考えられる。

しかし、「は」と「が」の使い方は、複雑で、日本においても学者により文法的な捉え方が違っている。学校において、どのような学説を紹介すればいいのか、教材とどのように組み合わせればいいのか、ほかの関連する文法と、どのような関係をつければいいのか、学習者のレベルにより、どの程度の文法を教えればいいのか、残る課題がまだ山ほどある。

また、調査から、中国人学習者が文章を書いているとき、常に「は」と「が」のどちらを使えばいいのかに悩んでいる。理論を身につけても、実際に使用するとき、間違えることがよくある。これから、理論を実践と結びつけ、自分が成長するとともに、「は」と「が」の使い方を分かりやすく中国人学習者に教えられるようになりたい。

【主要参考文献】

庵功雄 (2020) 「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み『言語文化』57、一橋大学語学研究室

孟玲秀 (2004) 「日本語教育における「は」と「が」の教授法」大阪教育大学大学院教育学専攻科修士論文